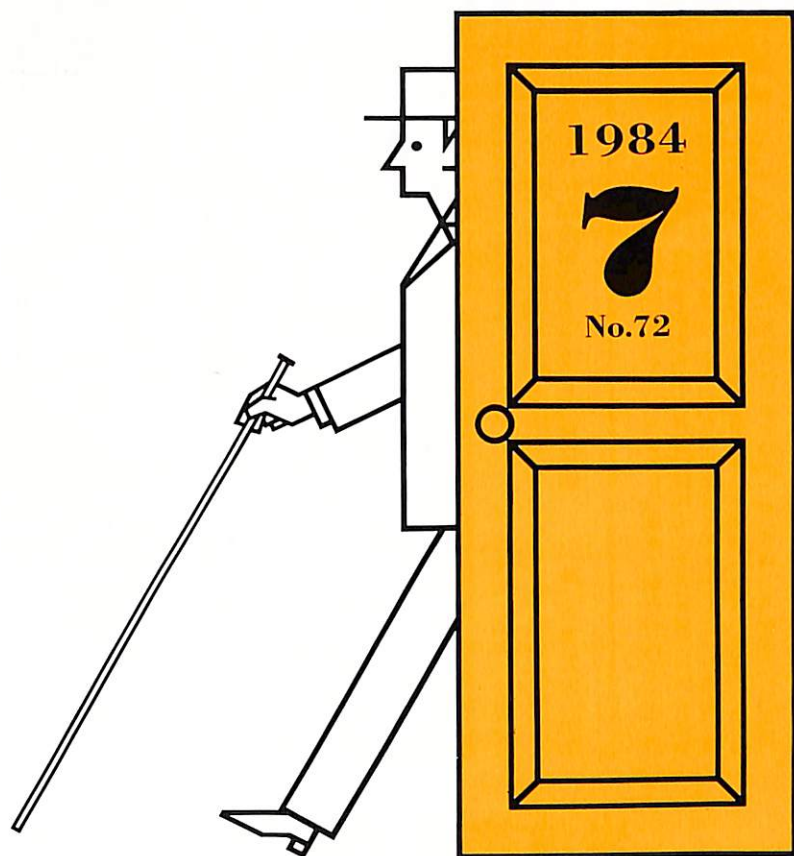


昭和四十六年六月一七日 第三種郵便物認可 昭和五十九年四月一五日 SSK通巻第二〇六号 (毎月六回、5の日、0の日発行)

視覚 障害

その研究と情報

特集＊点字図書館と公共図書館



ISSN 0385-7476

SSK

●典拠ある史実によつて、明治・大正・昭和三代を観る――

近代日本総合年表

第二版

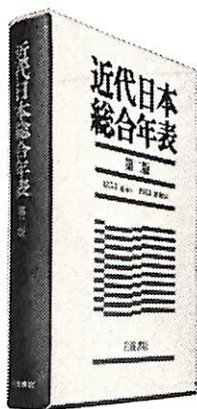
一八五三年(嘉永6年)―一九八三年(昭和58年)

〔編集〕

勝本清一郎 星野芳郎
西田長寿 藤原 彰
江口朴郎 今井清一
八杉竜一 内川芳美
山本二郎 山住正己
遠山茂樹 植手通有
丸山真男 山極 晃
隅谷三喜男 三和良一
安藤良雄 栗屋憲太郎

一九六八年(明治百年)に刊行の本書は、学問的な裏付けをもった本格的年表として高い評価を得、マスコミをはじめ国民の広い範囲で利用・引用されてきた。一年の全体像が一目でわかるよう、政治・経済・社会・学術・芸術・国外の6部門を見開き2面(4頁)で構成し、記載項目に典拠を明示した。巻末にまとめた四三〇〇点に及ぶ出典は研究・調査のよき手引きとなる。更に詳細な総合索引を付ける。初版所収項目に補訂を加え、最近十六年間の事項を増補した第二版。

■「内容見本」進呈



四六倍判上製
六五二頁
定価六八〇〇円

新版日本史年表

面目一新した、ハンディかつ最新・最良の「日本史年表」歴史学研究会編 日本史理解のための必要不可欠の記事を厳選し、原史料を確認する手続をへて成った新版。飛躍的発展をとげた歴史学及び関連諸分野の成果がここに凝縮。一九八一年まで収録。四六判四〇頁 定価二〇〇〇円

岩波書店



東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
振替番号 東京6-26240 千101

岩波書店の出版物は定価販売です。お求めの小社の書籍が小売書店にない時は、その書店にご注文ください。

目 次

1984年 7月 No.72

2 ページ評論	西尾 正二	2
---------	-------	---

特集 点字図書館と公共図書館

「点字図書館実態調査」に関する報告	染谷 洋子	5
点字図書館と公共図書館 ― 公共図書館の充実を	松本 昌三	13
落穂ひろい、点字図書館	水谷 昌史	18
18種類で飛び立つ試み		23
点訳と点写 ― 蔵書数増やし、貸し出し効率を上げる		
独自の活動		26

ボランティア西・東 社会福祉団体「歯車の会」		32
------------------------	--	----

この人と語る

人の気持ちのわかる弁護士に	松本 昌行・竹下 義樹	38
---------------	-------------	----

昭和59年度における大学進学と就職状況について		47
-------------------------	--	----

インフォメーション・コーナー		54
----------------	--	----

編集後記		64
------	--	----



点字図書館をどう見るべきか

日本図書館協会障害者サービス委員会委員長 西 尾 正 二

視覚障害者の読書に関しては、点字図書館が大きな役割を果たしてきたことは言うまでもない。しかし同時に、利用者の要望にじゅうぶんこたえてきたかといえ、けっしてそうではないことも明らかである。その原因の最大のものは、蔵書数の絶対的不足ということである。日本盲人社会福祉施設協議会点字図書館部会の図書館サービス委員会は、昨年かなり大がかりな実態調査を行なった。その集計を待たなければ最新のデータをもって語ることはできないが、点字図書館問題研究会が昭和55年に行なった調査によると、1館あたり平均蔵書数は、約4,000タイトルとなっている。これを公共図書館とくらべるとどうであろうか。単純な比較は問題ではあるが、昭和57年度の1館あたり平均蔵書数は約59,000冊になる。この現実を、点字図書館も公共図書館も直視すべきである。

これほど貧弱な蔵書しか持っていないまだその上に、点字図書館の蔵書のかたまりが拍車をかける。これも前記調査の集計を見るまでは、はっきりしたことは言えないが、従来、文芸物ばかりが多くて専門書が少ないとはよく言われてきたことである。特に意を用いて努力している館を除けば、一般的にそうであろうと思う。けれども、人間は、娯楽のためだけに読書するのではない。教養のため、学習のため、また、たとえ高度に専門的にではなくても研究・調査のために読書する。そのような利用者の要望には、多くこたえられないのが今の点字図書館である。

蔵書数の不足よりもっと深刻な問題は、点字図書館が「図書館」というなまえが付いているために、自分たちは図書館なのだと思います。

続けてきたことである。利用者の求める資料は、どんなことをしてでも提供しなければならないのだという認識がじゅうぶんでない、また、利用者のプライバシーを守るという点でも明確な意識がなくて、業務の上にも必要な処置がとられないままに、図書館であると思ってきたことがそれである。

他方、公共図書館が、「地域の住民」の中に当然含まれているいわゆる「障害者」をサービスの対象からはずしてきたことは、大きなまちがいであった。視覚障害者については、「点字図書館があるのだから」ということが一種の免罪符になったかも知れないが、他の障害者についてはそうは言えない。が、今それはおくとしても、その点字図書館が前述のとおりであるとすれば、点字図書館の存在は、公共図書館が視覚障害者に対するサービスを行なわない理由にならない。公共図書館は、「地域の住民にサービスをする」という本筋に従って、視覚障害者へのサービスを推進すべきである。

もっとも、点字図書館と公共図書館は相協力すべきであるとか、役割分担をすべきであるという考え方もあるにはあるが、今はまだその段階ではないと思う。図書館サービスの理念と技術の面では、公共図書館の方がはるかにすぐれている。反面、点訳・録音等の技術と図書製作の体制は点字図書館の方が上である。この二つの面での両者の隔たりはあまりにも大きい。公共図書館は、障害者を含めた「地域の住民」へのサービスに全力をあげて取り組むべきである。点字図書館は、近年非常な盛りあがりを見せている「図書館」への努力の道を、より一層強力に歩いていくべきである。両者の協力体制とか、さらには点字図書館はどうあるべきかなどは、その時が来てからでなければ論じられないのではなかろうか。

立ち読み版はここまでとなっております。

続きをお読みになりたい場合には
社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター
までお問い合わせください。

— 編 集 後 記 —

前号から版組みや紙質を変えたところ、「紙が悪くなってみすばらしい」、「2段組みがなくなって、紙面が平板になった」、「グラビアがないのはさびしい」などの批判が、編集部に向ついで寄せられました。購読料値上げにともない、増ページしたのを機にイメージ・チェンジを図ったのですが、むしろ逆にイメージを悪くしたようで反省しています。さっそく本号から紙質を元に戻し、左右2段組みのページを復活しました。ただ、グラビアについては、印刷費の値上げがからんできますので、購読料値上げの波及効果をみて、復活するかどうか決めたいと思います。

その他の改正点については、文字間と行間を空けたことは、今のところ好評ですので、今後も継続したいと考えています。こうした点につき、読者の皆様のご意見をいただければ幸いです。

本号は、盲人に対する図書館サービスのあり方について特集しました。まだまだ揺れ動いている視覚障害者の図書館サービスにどのようなメスを入れれば、視覚障害者から歓迎される態勢を作り上げることができるか、水先案内の役を少しでも果たせれば幸甚に存じます。
(田中 徹二)

視 覚 障 害 1984年 7 月 No.72
年間購読料 3,000円 (送料とも)

発行日 1984年 7 月 1 日

編集人 (連絡先)

日 本 盲 人 福 祉 研 究 会

〒160 東京都新宿区高田馬場1丁目
日本点字図書館内 23番4号

電話 (03) 200-1130

振替口座 東京 6-16103

発行人 身体障害者団体定期刊行物協会

〒157 東京都世田谷区砧8-21-3

印刷所 合同印刷株式会社

〒130 東京都墨田区業平2-9-13
電 話 (624) 6111 (代表)

協賛団体 日本点字図書館